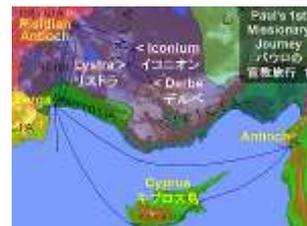


## I. 導入

おはようございます。使徒 13 章の最後で、パウロとバルナバはピシディア州のアンティオキアを離れ、イコニオンに移りました。イコニオンは、現在コンヤと呼ばれており、今も栄えるトルコの大都市です。パウロとバルナバは、紀元約 48 年ごろにこの町にいました。第一次宣教旅行の中盤です。



彼らはイコニオンの次にリストラを訪れました。そこでは、非常に興味深いできごとが起こります。その後、デルベの町へと移動します。この地図は、全行程を示しています。アンティオキアからキプロス、そして現代のトルコ中央部にあたる地域をめぐる再びアンティオキアに戻るといった経路でした。今日は、使徒言行録 14:1-20 をお読みします。ではまず、1-7 節を読みましょう。



## II. 聖書朗読

14:1 イコニオンでも同じように、パウロとバルナバはユダヤ人の会堂に入って話をしたが、その結果、大勢のユダヤ人やギリシア人が信仰に入った。 14:2 ところが、信じようとならないユダヤ人たちは、異邦人を扇動し、兄弟たちに対して悪意を抱かせた。 14:3 それでも、二人はそこに長くどまり、主を頼みとして勇敢に語った。主は彼らの手を通してしるしと不思議な業を行い、その恵みの言葉を証しされたのである。 14:4 町の人々は分裂し、ある者はユダヤ人の側に、ある者は使徒の側についた。 14:5 異邦人とユダヤ人が、指導者と一緒になって二人に乱暴を働き、石を投げつけようとしたとき、 14:6 二人はこれに気づいて、リカオニア州の町であるリストラとデルベ、またその近くの地方に難を避けた。 14:7 そして、そこでも福音を告げ知らせていた。

## III. 教え

パウロとバルナバは、まず会堂に行きユダヤ人と改宗者たちに語りました。そこでの反応は非常に良く、大勢のユダヤ人と異邦人が彼らのメッセージを受け入れてイエスを信じました。イエスの愛について、また十字架の死をとおして注がれたイエスの恵みあわれみについて語るパウロの話の聞こえ、毎晩たくさんの人たちがかけつけた様子が想像されます。反対勢力も起こりましたが、彼らは大胆に語り続けました。また、主が、しるしと不思議な業をとおして、彼らの恵みのメッセージを確証づけてくださいました。



使徒 14:3 「それでも、二人はそこに長くどまり、主を頼みとして勇敢に語った。主は彼らの手を通してしるしと不思議な業を行い、その恵みの言葉を証しされたのである。」とありますが、「しるしと不思議な業」などと聞くと、ちょっと怖いと思う人もいます。けれども、ここでわかるように、福音のメッセージを確証づけるためのしるしや不思議な業は、聖書的に見て健全な概念です。

さまざまな場面で、神の聖霊は信徒たちに力を与えて奇跡を行わせました。それは、神の御力を表し、人々をイエス・キリストの真理へと導くためです。神は全知全能のお方です。そして、時と場合によって、人々



を信仰と救いに導く最善の方法としてこのようなかたちをお選びになることがあります。奇跡は実在します。私自身、いくつかの体験があります。

しかし、しるしや不思議な業があったという話には、十分気をつけるべきです。そこには理由があります。説教者や伝道者がしるしや不思議な業を行えると宣伝している場合には、特に気をつけなければなりません。というのも、残念ながら、富や名声を手に入れるために、奇跡を行う者と自称する偽教師がいるからです。また、誠実に仕えるクリスチャンであっても、誤った思い込みをしてしまうことがあります。これは、何度か奇跡を経験したことで、自分が神に願えばいつでも奇跡を起こしてくださると勘違いしてしまうことです。しるしと不思議の業を行う時を選ぶのは神のみだということを忘れてしまっているのです。



私たちはいつでも、本当の奇跡が起こったなら、神をたたえて感謝をささげたいものです。しかし、イエスの福音を使って私腹を肥やそうとする人や、間違った思い込みを持っている人がいることも意識して注意したいものです。マタイ 24:24 にあるイエスの警告を覚えていきましょう。「偽メシアや偽預言者が現れて、大きなしるしや不思議な業を行い、できれば、選ばれた人たちをも惑わそうとするからである。」

パウロとバルナバは、イコニオンを離れてリストラに移りました。そして、そこで福音を宣べ伝えました。では続けて、使徒 14:8-13 を読み、リストラでのできごとを見ていきましょう。

#### IV. 聖書朗読

14:8 リストラに、足の不自由な男が座っていた。生まれつき足が悪く、まだ一度も歩いたことがなかった。 14:9 この人が、パウロの話すのを聞いていた。パウロは彼を見つめ、いやされるのにふさわしい信仰があるのを認め、 14:10 「自分の足でまっすぐに立ちなさい」と大声で言った。すると、その人は躍り上がって歩きだした。 14:11 群衆はパウロの行ったことを見て声を張り上げ、リカオニアの方言で、「神々が人間の姿をとって、わたしたちのところにお降りになった」と言った。 14:12 そして、バルナバを「ゼウス」と呼び、またおもに話す者であることから、パウロを「ヘルメス」と呼んだ。 14:13 町の外にあったゼウスの神殿の祭司が、家の門の所まで雄牛数頭と花輪を運んで来て、群衆と一緒に二人にいけにえを献げようとした。

#### V. 教え

**使徒 14:8 「リストラに、足の不自由な男が座っていた。生まれつき足が悪く、まだ一度も歩いたことがなかった」** この絵画で、カレル・デュ・ジャルダンは、パウロを私の想像した当時の姿よりずいぶん年老いて描いています。とは言え、これは非常に力強い絵です。足の不自由な男性が、短い松葉杖を両脇に抱えて体を支え、ひざまずいています。そこには数人の姿しか描かれていませんが、背景に大きな円柱の土台の部分がありますので、これが人里離れた場所ではなく、町の中であったことがわかります。パウロはそれまで、群衆に向かって語っていましたが、ここで足の不自由な男性に注目しました



この男性は、生まれつき歩くことができませんでした。けれどもパウロは、彼の顔に信じようとする心が現れているのを見、こう命じます。**(使徒 14:10) 「自分の足でまっすぐに立ちなさい。」**すると、「その人は躍り上がって歩きだした。」おそらく町中の人たちがこの男性を知っていたでしょう。生まれつき歩くことができず、同じ場所に何年もいて物乞いをしていたかもしれません。しかし、パウロの一言で、すぐさま奇跡的に男性の足に力が入り、しっかりまっすぐと立てる



ようになりました。奇跡が起こったことは、誰の目にも明らかでした。けれども、この奇跡を起こされたのが唯一まことの創造主なる神だということを、人々は理解していませんでした。

**使徒 14:11-12**「群衆はパウロの行ったことを見て声を張り上げ、リカオニアの方言で、「神々が人間の姿をとって、わたしたちのところにお降りになった」と言った。 **14:12** そして、バルナバを「ゼウス」と呼び、またおもに話す者であることから、パウロを「ヘルメス」と呼んだ。」ギリシャ神話の神々の中で、ゼウスは父であり王です。ヘルメスは神々の伝令役です。ギリシャ神話の信仰は、リストラでは一般的で、町の外にゼウスの神殿がありました。パウロのほうの話が多かったため、人々はパウロが伝令役の神ヘルメスだと考えました。人々がバルナバを神々の王ゼウスと呼んでいますから、彼は堂々とした風格のある男性だったのでしょう。

イコニオンには、ユダヤ教の会堂が古くからあったので、住民たちは創造主なる神について少しは知っていた可能性があります。しかし、リストラには会堂がなかったようです。ですから、唯一まことの創造主なる神について人々はまったく知らなかったのかもしれませんが、そこで起こった奇跡を自分たちの信じる場所に基づいて解釈したのでしょう。文化や信仰の背景が違った上に、言葉の壁もありました。パウロは通常、ギリシャ語で語りました。ギリシャ語は、ローマ帝国統治下で使われた交易言語です。しかし、それぞれの地域にはその土地の言語がありました。リストラで話されていたのはリカオニアの方言でした。それで、パウロとバルナバは、人々が何を言っているのか誰かが通訳してくれるまでわからなかったでしょう。

その結果、大きな誤解が生じました。奇跡が起きて主を賛美すべきところを、群衆はパウロとバルナバが神だと勘違いしたのです。こういった理由で、ある文化ではクリスチャンの間で比較的奇跡が少ないのかもしれませんが。例えば、日本では教会で奇跡が起こったという報告はあまりありません。もしかすると、奇跡が起こると、多くの日本人は主をたたえるのではなく奇跡を起こした人をたたえる危険性があるからなのかもしれません。

ともかく、事態が収束するまでに、大きな混乱が起こりました。**使徒 14:13**「町の外にあったゼウスの神殿の祭司が、家の門の所まで雄牛数頭と花輪を運んで来て、群衆と一緒に二人にいけにえを献げようとした。」これは宣教師の一番恐れる状況です。はっきりと伝えなければ、イエスではなく自分に注目を集めてしまうこととなります。福音を分かち合うとき、私たちではなくイエスがたたえられてほしいと望んでいるからです。

では、話の続きを見てみましょう。1515年、ラファエロはこの場面をこのように描きました。パウロとバルナバが左側に、そしてゼウスの神殿の祭司と群衆がいけにえを捧げようと彼らのもとに押しかけている様子です。パウロとバルナバはどんな反応をするでしょう。**使徒 14:14-20**を読みましょう。



## VI. 聖書朗読

**14:14** 使徒たち、すなわちバルナバとパウロはこのことを聞くと、服を裂いて群衆の中へ飛び込んで行き、叫んで **14:15** 言った。「皆さん、なぜ、こんなことをするのですか。わたしたちも、あなたがたと同じ人間にすぎません。あなたがたが、このような偶像を離れて、生ける神に立ち帰るように、わたしたちは福音を告げ知らせているのです。この神こそ、天と地と海と、そしてその中にあるすべてのものを造られた方です。 **14:16** 神は過ぎ去った時代には、すべての国の人が思い思いの道を行くままにしておかれました。 **14:17** しかし、神は御自分のことを証ししないでおられたわけではありません。恵みをくださり、天からの雨を降らせて実りの季節を与え、食物を施して、あなたがたの心を喜びで満たしてくださっているのです。」 **14:18** こう言って、二人は、群衆が自分たちがいけにえを献げようとするのを、やっとなやめさせることができた。 **14:19** ところが、ユダヤ人たちがア

ンティオキアとイコニオンからやって来て、群衆を抱き込み、パウロに石を投げつけ、死んでしまったものと思って、町の外へ引きずり出した。14:20 しかし、弟子たちが周りを取り囲むと、パウロは起き上がって町に入って行った。そして翌日、バルナバと一緒にデルベへ向かった。

## VII. 教え

**使徒 14:19b** にはこうあります。「パウロに石を投げつけ、死んでしまったものと思って、町の外へ引きずり出した。」パウロとバルナバは、すでに何度か抵抗に出くわしていましたが、イエスの御名のためにこれほど厳しい苦難に遭ったのは初めてだったのではないかと思います。パウロは石打ちに遭い、バルナバも暴力を受けました。



しかし、パウロはまもなく起き上がりました。**使徒 14:20** はこう語ります。「しかし、弟子たちが周りを取り囲むと、パウロは起き上がって町に入って行った。そして翌日、バルナバと一緒にデルベへ向かった。」パウロは本当に死んでしまって、弟子たちが祈った時に復活したと考える人もいます。また、大きな癒しの奇跡が起こったと考える人もいます。いずれにせよ、パウロがリストラの町に再び入っていったのはすばらしいことだと思います。パウロに石を投げつけた人たちは、町に戻ってきたパウロを見たでしょうか。パウロが町に戻ってきて、人々はぜひぶん驚いたことでしょう。

私の知る限り、ここには石打ちに遭ったことのある人はいないでしょう。けれども、イエスの福音を大胆に分ち合うと、何らかの抵抗に遭う可能性は高いです。悪魔は、人々にイエスを知ってほしくないと思っています。ですから、悪魔の手下とされている人たちは、イエスの福音を語るメッセージに敵対するでしょう。それが、墮落したこの世に生きる現実です。私たちは、抵抗や迫害さえ受けるかもしれないという心の準備をしておくべきです。



リストラの話に戻りますが、パウロのメッセージを人々が誤解したことがわかって、パウロはこのように説明します。**(使徒 14:15b)**「あなたがたが、このような偶像を離れて、生ける神に立ち帰るように、わたしたちは福音を告げ知らせているのです。この神こそ、天と地と海と、そしてその中にあるすべてのものを造られた方です。」すべてをお造りになった創造主なる神は、礼拝すべきお方です。それ以外の神々といわれる物には、何の価値もありません。そのようなものに真理はありません。

今日のメッセージを終える前に、少し**使徒 14:16-17** に注目したいと思います。創造主なる神について、パウロは続けてこう語ります。「神は過ぎ去った時代には、すべての国の人が思い思いの道を行くままにしておかれました。14:17 しかし、神は御自分のことを証ししないでおられたわけではありません。恵みをくださり、天からの雨を降らせて実りの季節を与え、食物を施して、あなたがたの心を喜びで満たしてくださっているのです。」

神は、歴史上のすべての国々の人たちが聖書を読めるようにされたわけではありません。しかし、自然の恵みというかたちで、神はご自身とその愛をすべての人に示されます。ここで、パウロは雨や実り、四季、食物、喜びを挙げています。



皆さんは、「摂理」という言葉をご存知ですか。辞書には、摂理とは「神、または霊力としての自然による配慮」とあります。神は主権者で

すから、宇宙を統べ治めておられます。また、神は愛ですから、ご自身の被造物とすべてのできごとに関心を持ってくださっています。このように、神が私たちのことを心にかけてくださっているので、いろんな形で私たちの必要を備え、祝福してくださいます。私たちが目にする良い物、そして人生で感じる喜びは、神の摂理によるのです。

摂理という単語は聖書にほとんど登場しません。訳によっては一度も出てこないものもあります。にもかかわらず、神の摂理は聖書のすべてのページに示されています。以下はその一例です。

ヨブ 10:12 「わたしに命と恵みを約束し、あなたの加護によって、わたしの霊は保たれていました。」

詩篇 3:6 「身を横たえて眠り、わたしはまた、目覚めます。主が支えていてくださいます。」

フィリピ 1:6 「あなたがたの中で善い業を始められた方が、キリスト・イエスの日までに、その業を成し遂げてくださると、わたしは確信しています。」

神は私たちに命を与え、いたわってくださいます。私たちを守り、支え、そして神が私たちの内に始められた良い業を完成してくださいます。これらは、神が私たちを愛してくださることを、神の摂理が示している一例にすぎません。他にももっとももっとたくさんあります。例えば、**詩篇 104:14-15** にはこうあります。「**104:14 家畜のためには牧草を茂らせ／地から糧を引き出そうと働く人間のために／さまざまな草木を生えさせられる。104:15 ぶどう酒は人の心を喜ばせ、油は顔を輝かせ／パンは人の心を支える。**」愛情あふれる神の摂理は、本当にすばらしいものです。そして、その気になりさえすれば、日々の生活の中にその摂理を見ることができます。

## VIII. 結び

今日の聖書箇所のパウロとバルナバから、たくさんのことを学ぶことができます。そして、その模範に倣って、勇気をもって大胆にキリストを宣べ伝えれば、それはりっぱなことです。けれどもそれ以上に、神の摂理について思いをめぐらせていただきたいと思います。そして、愛に満ちた神の模範に倣うにはどうすればよいだろうかとじっくり考えてください。神は被造物すべてを心にかけてくださいます。神はすべてのものを愛し、恵みを与えてくださいます。そんな神の模範に倣うなら、私たちもすべての人を愛せるようになるのではないのでしょうか。今日は最後に、**マタイ 5:44-45** を読みましょう。この箇所では、神が愛をもって摂理を示してくださいましたおかげで、私たちもすべての人を愛そうと思うようになるはずだと、イエスは教えてくださいます。「**5:44** しかし、わたしは言うておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。**5:45** あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。」

祈りましょう。

## IX. 祈り